

埼玉育ちのグローバル人



僕が僕であるために～世界という世界の中で 第2回 ～苦悩 大学入学、そして留学～

オペラ歌手テノール、新国立劇場合唱団メンバー

コル・カント合同会社 代表社員、NPO 団体 富士見みんなでプロジェクト 代表

東海林 尚文さん



埼玉県マスコット「コバトン」

【これまでの流れ】

前回、私のオペラとの出会いを幼少期からの思い出とともに書いてきたが、第2回目となる今回のエッセイではオペラ歌手として今を生きている私の礎となっている東京芸術大学への入学とその後の卒業してからのイタリア留学のことを書きたいと思っている。

前号の最後に K 先生との出会いのことを書いたが、歌手としての私のすべての始まりと言える人生を変える出会いだったので今一度おさらいしてみようと思う。以下に前回の一部抜粋記事を掲載する。

～以下抜粋記事～

面白い出会いだった。K 先生は私の声を聞くこともなく、レッスンをやるともやらないとも言わず、とにかく歌をやる覚悟はあるのかという事を私と同席していた両親にしきりに聞いていた。覚悟といわれてもその時はオペラ歌手になろうなどとは思っていなかったもので、とにかく歌を習いたいという事を一生懸命お話ししたと思う。

しばらくすると K 先生が思いもよらない衝撃的なことを私たちに話してきた。

K 先生 「歌をやりたいなら大学に入りなさい・・・。」

私 「えっ、大学ですか？」

K 先生 「東京芸術大学を受験してみなさい。」

私 「げいだい？」

どうしてこんなことをおっしゃったのか真意の程は定かではないが、とにかく声楽のレッスンを

受けるために K 先生に会いに来ている私としては「はい、ではやってみます」としか答えられなかった。そしてその一言によって私のオペラ歌手への第一歩となる東京芸術大学入学への戦いが始まるのである。

それはまた血のにじむような地獄の戦いでもあった。そしてその後の長く苦しい苦悩への始まりでもあった・・・。

～以上抜粋記事～

一部前回と内容を変えている部分があるが、前回この部分まで書いて終えているので今回のエッセイをわかりやすくする為にここからつなげていきたいと思う。

【無知から始まる受験勉強～情熱と努力が原動力】

ということで、これから本題に入るわけだが、これがきっかけとなってオペラ歌手になりたいという私の荒唐無稽だった夢が現実化していくわけである。本当に人生というのは人との出会い、いわゆるメンターとの出会いというのが重要であると知らされる出来事であった。

K 先生はとても情熱をもって、全くの素人である私に対しても分かりやすく丁寧に、そして辛抱強く、時には叱咤激励しながら私が音楽家となる道を示し、導いてくれた。

しかしながら、歌いたいと思う気持ちとは裏腹に音楽大学に進学するという事は当然のことながらまず受験をしなければいけないという関門が

くるわけである。ましてや芸術分野において日本の最高学府といわれる東京芸術大学を受験するという関門にぶつかったわけである。全くもってお恥ずかしい話で実はあまり人には言っていないことなのだが、K先生からお話があったその時には私も私の両親も東京芸術大学を知らなかったという笑い話が残っている。東京芸術大学と東京学芸大学との違いすら知らずに、芸大受験を承諾してしまったのである。今考えるととても恥ずかしいことだが、反対に教訓として、知らないという事（一般的に常識だと思われていること）は時として自らのブレーキをかけないで済むことなのかも思っている。もし、その時に芸大受験を恐れるような環境に自分がいたとしたらきっと大学には合格していないと思うし、受験すらしていないかもしれない。本来は何か事を起こすときには情報入手して知ることから始めるものだが、恐れずに立ち向かうためには反対に知らなくてもいい事があるのではないかと感じた出来事でもあった。

とは言え、芸大の受験には当然ながらたくさん関門が待ち構えている。すべては自らがまいた種なのだが、歌の試験はもちろんのこと、ピアノや音楽の基礎知識である楽典、音を聞いて楽譜に書く聴音などがあり、更には国立大学に必須なセンター試験もやらなくては行けない。ただテレビで見たオペラ歌手のように歌を歌ってみたいと思っていただけの私には想像もできないほど過酷なことであり、今思えば、楽譜を読めないどころか音符すら読めなかった状態での挑戦という無謀にもほどがある、とんでもない試練が突然降りかかってきた22歳の夏の出来事だった。



(写真1 楽譜)

当時の私は明治大学法学部の4年だったが、まわりの同級生はみんな就職活動などで動きまわっていた時期だったと記憶している。まわりの就活を横目に突如として芸大受験を始めた私を同級生たちは冷ややかな目で見ているのを感じていたが、私は特に気にもならず新しい環境に身を置いている自分を誇らしく思っていた。何か集中できることがあるとまわりの目は気にならなくなる、そして今までは当たり前だと思っていた世界がどんどん変わってくる、人生のターニングポイントが訪れているそんな気がして寂しいというよりもワクワクした気持だった。もちろん人の忠告に耳を傾けないのは良くないことだとは思いますが、明確な目標に向かっている時にはその前へ進む力を弱めるような力はなるべく排除するべきだと今でも思っている。

芸大に合格するまでの話はそれこそこのエッセイ一回分くらい沢山あるのだが、それはそれは、かなり大変な日々であったと想像できるだろう。今回は文字制限の関係で割愛させてもらうが、実は芸大の受験そのものよりもその年、大学卒業と大学入学を同時にすることのほうが私的には遥かに大変だったという事を付け加えさせてもらいたい（笑）

【無事合格！喜び、現実直面、苦悩の大学生生活】

晴れて東京芸術大学音楽学部声楽科に入学することになったのは平成9年で上野公園の桜並木の道を越えて学校まで歩き、大学の校門をくぐるときの感動は今でも忘れられない。この時はこれから望む、望まざるにかかわらず常に比べられて、人より優れているのかどうかを判断される地獄のような生活が待っているとは想像することもできず、大学に合格した喜びそして新しい生活を迎える希望に満ち溢れていた。



(写真2. 東京芸術大学入口)

さて、いよいよ大学生活の話になるが、一般の大学はゼミが3年生くらいから始まるものだが、音楽大学は1年生からゼミのような制度が始まる。門下制度と呼ばれているのだが、よほどの問題がない限り、1年から4年まで一人の先生に面倒を見もらうことになるのである。これは声楽のみならずピアノや楽器を専攻している学生にも当てはまる。とても不思議な制度である。私は偶然にもとても性格の合う先生の門下となれたからいいが、合わない場合は大学生活そのものが苦しいものになってしまう可能性すらある制度だと思う。実際に何名かの友人は先生との相性が悪く、学校自体に来なくなってしまったという事実もあった。私感としては無くなったほうがいいと思うシステムだが、一人の先生に生徒が集中しないように分散させるということもあるのかもしれない。

また、当然といえば当然なのだが音楽大学では実技の試験（声楽科の場合はオペラアリアなどの歌唱実技）のたびにその出来によって成績がつけられる。という事は、常に試験のたびに順位がつけられ優劣が決まる。成績が優秀な者は当然自信もつくし、自分の歌が認められていることを確認できるが、そうでない者は自分の歌に自信が持てずに下手なんじゃないかと疑心暗鬼となる。自分の存在意義すらわからなくなってきてしまう。それが大学4年間続くわけだし、大学院に進もうとすればより判断材料として必要になってくるわけである。大学入学時の説明会の時にある先生がこうも仰っていた。「1年間に入学してくる声楽科は60人いる、この中で世に出られるのは1人か2人でその他の者は彼らのサポート役に過ぎない！」・・・希望を胸に入学してきた私にとっては非常に不愉快

な話ではあったが、音楽業界（主にクラシック音楽の世界）の厳しさを話したんだろうと思う。実際に芸大だけでも60人の声楽家が毎年60人も排出されるわけで、全ての声楽家がプロとして歌えるものではないという事が想像できるだろう。

大学生活は楽しかった。年下の同級生たちとは学園祭をはじめ様々な行事と一緒にやって楽しかったしろんなどところに旅行に行ったりして2度目の大学生活もとても充実したものだ。しかし、全国から集まってくる本当に優秀な音楽家の卵たちの素晴らしい才能には、音楽を本格的に初めて1~2年の私には到底及ぶはずもなく、努力では補えないほどの差を次第に感じるようになる。学園祭などでオペラやコンサートを学年単位でやるのだが、どんどん自分の才能に自信がなくなっていった私は表舞台に出て歌うこともなく大学時代は裏方の作業、いわゆる舞台準備や制作などをみんなのためにやっていたことを思い出す。学校での成績も常に真ん中よりも下くらいで最終学年4年の学内演奏でも目立った成績をあげることもできず、大学院の試験にも落ちて歌を歌うことに自信がなくなり、その後の進路についても考えなくてはいけなくなる時期でもあり私にとって大学最終学年は非常に辛く苦しい時代だった。

【芸大卒業後、やめない努力の結果…】

そんな中、私立の定時制高校の音楽非常勤講師の話が舞い込んできて、卒業してからすぐ1年間だけ高校の先生をやっていた時期もあるのだが、先生という仕事にどうしてもなじみず、とにかく歌の自信は失ってはいたが表舞台で人前で歌いたいという強い気持ちがわいてきた。今思うと、あきらめない気持ち、やりたいと思う気持ちに正直に生きてきてよかったと思えるし、最近よく使っている言葉だが「やめない努力」をしてきて本当に良かったと思う。やめないための努力とは時として非常に苦しいものであるが、もがき苦しむ中で何かの光が見えたときは「あきらめなくて良かった」と少し自信が回復する。その小さい自信の積み重

ねが自分の血となり肉となる。「やめない努力」を続けていけば、皆さんも必ず自分自身を逞しく、誇らしく思える自分になれると思います。

私がこのやめない努力の末に見出した光が、イタリア・フィレンツェへの留学だった。世界3大テノールを見た時からオペラという音楽文化とイタリアという国に対する興味は持っていたが、声楽の勉強のためにイタリアに留学することになるのは今思い出してもとても面白いことだったと思う。自信を無くしていた私の歌をもう一度、何かきっかけになれば大好きな歌が歌えるようになるかもしれない、そう思ったらいてもたってもいられなくなり、留学の準備を少しずつ始めていくことになる。

苦勞の末に入学した大学で、想像もしえなかった競争についていけずにオペラ歌手になるんだという夢や希望、そして歌うことの楽しさすら忘れてしまうくらい自信を無くして、自分の存在意義すら見失ってしまうくらい非常に苦しくて辛い時期が大学生活から留学までの時期だったと思う。苦しい時期に心が折れそうになりながらも「やめない努力」をしてきたおかげで、悩み考え、留学するという答えを導き出せたことはいま私がある人生の重要な転換点だったことは間違いない。留学の話はいよいよ最終となる次回に詳しく書こうと思っているが、イタリアに留学して素敵な人たちにたくさん出会い、音楽の楽しさ、歌うことの本来の意味、自分を客観的に見つめて自問自答を繰り返せた貴重な時間、日本にいたら絶対に経験できないような素敵な経験をたくさんして、技術的にも精神的にも強くなって帰ってこられた素晴らしい経験がそこにはあった……。 (次回へ続く)